

り寒い時には綿を少し入れておくのがよろしい。  
 幼児が言語を言ふやうになるは初は他人の言ふ  
 のを聴いてまねるのである。ですから耳が不完全  
 な兒は言ふことも不完全である。耳と發音は相伴  
 ふものである。

因みに云ふが、吃りはなるべく一度でもどもら  
 せぬやう叱らず笑はず氣永くなほすべきで、初の  
 音をひつぱるやうにして導いてやるがよろしい。

即ち赤と言はせるにはアーカと言はせる類です。  
 又呼吸の練習が必要です。そうしてうまく言はれ  
 た時にはほめてやつて、言はうとする心をふり起  
 してやるがよろしい。又物を言ふ前に、拍子をと  
 りて後言はせ、又は言ふと同時に拍子をとらせる  
 がよろしい。

物を言ふには耳のみならず目の方も助ける。即

ち他人の話す蒸に、其口を見て居るので盲目の人  
 の口の動かし方が見苦しいのは人の口の動き方を  
 見ぬからである。又目で場處を見て其處に必要な  
 だけの聲を出すことも必要である野卑な大聲は是  
 非共矯正しなければならぬものである。

小笠原父島の二見港(承前)

やて

大村は群島中の都とも稱すべき地で、一連の山  
 脈は背後を擁し、海岸には一帯の林樹風潮を防ぎ、  
 園圃も能く開けて居り、市街は主線をなして軒を  
 並べて居る。戸數は二百六十五、人口千二百八で  
 わつて、本群島、硫黄島、南鳥島を管して居る小  
 笠原島廳を初めとし、父島區裁判所、父島郵便局、  
 尋常高等小學校等皆此村に在るのである。毎月一

回横濱を發し八丈島などを經て來る定期船は此港に碇泊すること一二日で、母島に行き二三日の後歸り來り、更に一二日滯船して、内地に向つて島の音信を送るのである。其の時は丁度内地歳暮の有様で、人々皆多忙を極めて居つた。

小笠原嶋は八丈島よりも、一層南に離れて居る事だから、一寸考へると其の人情風俗は餘程變つて居るやうに思はるゝが、實は左様でない。一言にすれば八丈島は人情風俗に於て、小笠原島は天然物に於て、大に内地と違つて居るのである。之は八丈の人は皆古く八丈に居るものばかりであるから古風を存し、小笠原は何れも近時移住したもののばかりであるから内地と大差がない。天然物殊に植物などはさすが亞熱帯の地であるから、其の種類を異にして居るのである。昨年の温度は七月

廿一日の三十二度六分を最高として、一月十九日の九度二分が最低である。先づ年中單衣一枚でゆけるのである。

島民の服装や頭髮は男女ともに内地と同じく、言葉も東京辯であるから、先きに八丈で言葉が通じなくて困つた様な事はなかつた。小學校の子供も男子は筒袖に袴、女子は海老茶袴、歸化人の子弟は洋装をして居るからなか／＼立派であつた。家屋は八丈島と司しく、風害を恐れる爲めと、土地が乾燥して居る爲めとで、軒並も椽下も共に低く、二階造りは殆んど皆無である。柱類は黄檀が桑で、屋根は櫻櫛の葉で葺き、壁は板又は櫻櫛の葉である。室内は疊はなく板間か薄縁敷である。全体に小奇麗で香蕉や椰子の葉が窓前に揺らぐ有様は實に愉快であつた。茲に一つ云ふべき

は、小笠原では庖厨所はコック場と云つて、軒を別にして居る事である。粗の音も聞えず、煮物の香もせず、實に奇麗であつた。是れ皆歸化人に見習つたのであらふ。

〇〇 扇村は大村の對岸にあつて、其の間には數隻の渡船が晝夜とも往復して居るから至極便利である。元島廳の在つた所だが、土地が狭いから大村に移したのである。戸數百廿六、人口五百七十二、大村に次で第二の村である。高等科單級尋常科二學級の小學校と、巡查駐在所とがある。當時朝鮮の前大臣兪吉睿氏は、此に亡客となつて新に小屋をつくつて居つた。村の後丘に大久保利通公の撰文なる小笠原群島開拓碑と、黒川主水春村が撰した、幕府が同島を開拓した紀念となつて居る新ばりの碑と、外に二つの碑があつた。

〇〇 奥村は歸化人の居住する所で、二見灣の最奥にあるから此の名がある。歸化人は「ヘッド、オフ、ベ」<sup>一</sup>と云つて居る。現時小笠原島内の歸化人は、戸數二十六、人口百十である。彼等の家は白ペンキで壁を塗り、室内には椅子寢台があつて、内地の木造の西洋家屋の小なるものである。此等歸化人の先祖とも云ふべきは、本島移住の原始者なる米人子サチル、セーボレで、天保元年（七十二年前）に英人丁抹人伊太利人等同志五人で、布哇人十七名を率ゐて來たのが始めである。今日では世界各人種を集めた雜種である。今や彼等は帝國の臣民となつて、安樂に生涯を送り、日本人との間は誠に親密である。殊にジョセフ、ゴンザと云ふものは、歸化人と日本人との間に出來た雜種で、多年神戸の某學校にも遊學して居り、相當の教育

もあるから、歸化人を代表して、村政に参かり萬事都合よく運び、又學校を開いて歸化人の子弟は勿論日本人の子弟にも、英語其他の學科を教授し、且つ大村の小學校にも雇はれて、英語の教授をして居つて、同島の教育上に功勞鮮くないのである。思へば此の日東の帝國が南海の離れ島に、斯かる忠順な歸化人を有して居るのは、何等かの瑞兆であらふ。

總りに一言せねばならぬは、由來僻陬の地や絶海の孤島は、人が注意せないもので、帝國の南關なる此の群島も、之にもれないのは實に残念である。願くは家庭談話の材料に加へて貰いたいものであると思つて、かくもながく述べてたのである。

(了)

## 史傳

エドワード、デロング (承前)

米

溪



風に父を喪ひ、母の手一つに人と爲りしエドワードの、今は母さへ、亡き人となり、誰に寄るべき所もなく、獨り、行途を定めざるべからざるに至りしが、朝に、母の訓へに心を緊め、夕に、其の温かなる愛の懷に、正しき教を受けしより、心も自から化して、波間に漂ふ捨小舟の如き、今の身ながら、己か針路も過らで、智を研ぎ、道を修めん志深く、母の日頃の賜として、僅ばかりの貯へあるも、節して事に用ふるも、書購ふたに、